18　次の文章は、狂歌師のとその友人である俳諧師をめぐる話である。読んで問いに答えよ。 〈東北大〉　二〇一五年度出題

　　　ある年八月のなかば、をたてて、縄もて結びて、いと高きうてなを仮につくりて、千本とふたり、これにのぼりて月見んとちぎりおきつ。かくて十四日といふ日になりけるとき、かのの方よりして、「今日なん空も晴れわたりぬ。きはめては月もよからんとおぼゆ。とく来給ひて、の月見給へ」と言ひおこせたり。アとばかりありて日は暮れぬ。この俳師、千本がおそきを待ちわびて、むかへに来けるが、千本は家にあらず。人々に問へば、「あるじは先にいづこへかでられたる。月見は明日のこそよけれ。今宵にかぎることかは」と、人々の言ふを聞きて、この俳師、心のうちにいかり、「さては、千本、家のものどもに、かく言ひ教へおきて、いづこへか出で行きけん。約をたがへぬることこそうらみなれ」と言ひつつたち出でしが、やがてまた来たりて、ひとひらの紙に書きしものをの戸にはりおきて帰りぬ。人々出でて読み見るに、

　「⑴明日ありと思ふはあさき月夜かな」

と書きてあり。

　かくて、かの俳師、家に帰りければ、おのれが家のにもまたひとひらの紙はりてあり。「何にかあらん」と読みて見れば、

　「⑵明日ありと思ふ心のおこたりはなくてさやけき秋の夜の月」

　この人、大いにおどろき、「これ千本が筆のすさみなり。わが千本が家にしるしおきたる句を知らずは、よもこの歌は詠み出づることあらじ。されど、わが句を見て、しかして詠み出でたらんには、われより先に来たりてここにしるしおくこと難かるべし。こはまたくなどのなししわざなるべし」と思ひて、入りて家のものどもに問ふに、「千本ぬしはさらに見え給はず」と答ふ。ますますあやしくなりて、しきりにイそぞろきしつ。に出づるもおそろしくなりて、そがままふしどに入りて寝にけり。すでに暁のころになりて、⑶に人の声す。かの俳師おどろき、をもたげて、これを聞くに、

　　「枝ぶりのなくてどちらもおもしろし月の桂にの松虫」

といふ歌をいくたびか吟じける。その声、千本につゆたがはず。「されど、かくに声するは、きはめて狐狸のわれをたぶらかさんとてなすわざにや。または、千本は仙術など学び得たるにや」と、ますますおそろしくなりて、きぬ引きかぶりてふしけり。

　次の日も頭いたみ寝ついて心地よからねば、昼過ぐるころまで起き出でずありしが、やうやう心地よくなりて、外に出でて、何の心もつかず、かの仮につくりたるうてなの上にのぼりけるに、千本はここにふし居たり。おどろきて引き起こして問ふに、千本の言ふ。「われ、御身とかたくちぎりたることなれば、よべはとくよりここにのぼりて、月見てあかしたり。約をたがへてここにのぼり給はざるは、いといとうらみにこそあれ」と言ひける。かくばかり高きうてなの上にて歌吟じければ、空中に声ありと思ひしもなり。かつ、⑷千本は性急なる人なれど、月にめでて、かく心ながかりしも風流なり。また、宵のほど詠みける「明日ありと思ふ」の歌は、にせしことなるよし、世にをかしきことはあるものぞかし。

（八島定岡『狂歌現在奇人』による）

問１　傍線の箇所ア「とばかりありて日は暮れぬ」、イ「そぞろ寒き心地しつ」をそれぞれ現代語訳せよ。

問２　傍線の箇所⑴の句「明日ありと思ふはあさき月夜かな」の意味を答えよ。

問３　傍線の箇所⑵の歌「明日ありと思ふ心のおこたりはなくてさやけき秋の夜の月」の意味を四十五字以内で答えよ。

問４　傍線の箇所⑶「空中に人の声す」について、その声は実際には何だったのか。二十字以内で答えよ。

◎問５　傍線の箇所⑷に「千本は性急なる人なれど、月にめでて、かく心ながかりしも風流なり」とあるが、筆者は千本のどのような言動を「風流」と評しているのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　ア＝しばらくして日は暮れてしまった

　　　イ＝何となくぞっとする感じがした

「寒気がした」「うすら寒い気がした」も可。

問２　Ａ月見は十五夜の月がよいと考え、明日を待って、Ｂ今夜のこの美しい月を見逃してしまうあなたは風流がわからず浅はかだという意味。

Ａ＝５〔「十五夜の月」がなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔「風流がわからず」か「浅はか」のどちらかがあれば可。〕

問３　Ａ十五夜の名月を見ればよいという気の緩みはなく、Ｂ今日の素晴らしい月を愛でるつもりだよ。（42字）

Ａ＝５〔「十五夜の名月」がなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔「素晴らしい」がなければ減点２。〕

問４　Ａ月見の台の上でＢ名月を歌に詠むＣ千本の声。（19字）

Ａ・Ｂ・Ｃがなければ全体０。

問５　Ａ早くから台に登って待つといったせっかちな面もあるが、Ｂ約束通り友を待ちながら、Ｃ一晩中月を愛でて歌を吟じていたという言動。（59字）

Ａ＝３／Ｂ＝２〔「約束した友」でも可。〕

Ｃ＝５〔「月を愛で」「歌を吟じ」がなければそれぞれ減点２。〕

# 【現代語訳】

　（俳諧師は）ある年の八月の半ば、丸太を立てて、縄で縛って、とても高い台を仮に造って、（狂歌師の浅穎庵）千本と二人で、これに登って月を見ようと約束していた。こうして十四日という日になったとき、その俳諧師の方から手紙が来て、「今日は空も晴れ渡った。この上なく今夜は月も綺麗だろうと思われる。早くおでになって、陰暦八月十四日の夜の月をご覧なさい」と言ってよこした。問１アしばらくして日は暮れてしまった。この俳諧師は、千本が（来るのが）遅いのを待ちくたびれて、迎えに行ったが、千本は家に居なかった。（家の）人たちに尋ねると、「主人は先ほどどこかに出て行かれた。月見は明日の夜が素晴らしい。今夜に限ることだろうか、いやそうではない」と、人々が言うのを聞いて、この俳諧師は、心の中で怒り、「それでは、千本は、家の者たちに、こう言い告げおいて、どこかへ出て行ったのだろう。約束を守らないことこそ不満である」と言いながら立ち去ったが、すぐにまた（戻って）きて、一枚の紙に書いたものを門の扉に貼りつけて帰った。人々が（外に）出て読んで見ると、　  
　　「問２月見は十五夜の月がよいと考え、明日を待って、今夜のこの美しい月

を見逃してしまうあなたは風流がわからず浅はかだなあ」

と書いてある。

　こうして、その俳諧師が、家に帰ったところ、自分の家の門にも同じく一枚の紙が貼ってある。「何であろう」と読んでみると、

　　「問３十五夜の名月を見ればよいという気の緩みはなく、今日の素晴らしい

月を愛でるつもりだよ」

　この人は、とても驚いて、「これは千本の筆跡である。私が千本の家に書いて置いた句を知らなかったら、まさかこの和歌を詠み出すことはできまい。しかしながら、私の句を見て、それから（この和歌を）詠むようなことは、私より先に来てここに書き記しておくこと（となりそれ）は難しいことだろう。これは全く狐や狸などが成し得る仕業であろう」と思って、（家に）入って家族の人たちに尋ねると、「千本さんは全くいらっしゃってません」と答える。ますます不思議に思って、問１イやたら何となくぞっとする感じがした。外に出るのも恐ろしくなって、そのまま寝室に入って寝てしまった。すっかり夜明け前になって、空中から人の声がする。この俳諧師は驚いて、頭を持ち上げて、これを聞くと、

「月に生えるという桂の木も枝が見えないほどあざやかに紅葉していると思われるほど月が輝いている。（木ではないので枝はないが）秋の野に人を待つという松虫の声（私の声）がする。どちらも趣があるよ」

という和歌を何度か口ずさんでいた。その声は、千本にまったく違うところがない。「しかし、このように空中（中天）に声がするのは、きっと狐や狸が私をそうとして成せる仕業であろう。または、千本が仙人の使う術などを習得したのだろうか」と思って、ますます恐ろしくなって、着物を引きかぶって寝た。

　次の日も頭痛がして寝たきりで気分がよくないので、昼が過ぎる頃まで起き上がれずにいたが、次第に気分がよくなって、外に出て、何の考えもなく、あの仮に造った高い台の上に登ったところ、千本はそこに寝ていた。びっくりしてゆさぶり起こして尋ねると、千本が言う。「私は、あなたと固く約束したことなので、夕べは早くからここに登って、月を見て一夜を明かした。約束を破ってここにお登りにならないのは、大変な恨みである」と言った。こんなに高い台の上で和歌を口ずさんでいたから、空中より声がしたと思ったのも道理である。さらに、千本はせっかちな人であるけれども、月を愛して、このように気が長いのも風流である。また、夜になって間もないころ詠んだ「明日ありと思ふ」の歌は、偶然の一致であったといういきさつで、世の中には面白いことがあるものだよ。